

# 未来への伝承

第176回

## 田宿町の祭礼行列 ——「土浦御祭礼之図」から——

今回は江戸時代の土浦城下で毎年6月に行われていた、祇園祭について紹介します。

祇園祭では、12日に真鍋台の天王社(現在の八坂神社)の神輿が城下に渡り、翌13日に土浦城内へ遷され、土浦の安寧を祈る神事が執行されました。この神輿渡御にあわせて、城下の町組のひとつが当番となり、出し物(山車)や屋台、仮装行列などの出し物を披露し、祭りに華を添えました。当番の町組では、趣向を凝らした出し物を考えて準備をしたり、お囃子の練習をしたりして、祭礼に臨んでいたといわれています。

普段の祇園祭では当番の町組だけが出し物をしました。藩の命令により、すべての町組が参加した年が数回ありました。「惣町大祭」などと呼ばれた大規模な祭礼で、このうち文化9(1812)年の様子が「土浦御祭礼之図」(土浦市指定文化財)に記録されています。

この祭礼図は、土浦で最初に醤油醸造を始めた国分勘兵衛家に伝来したもので、作者は下総国佐原(現千葉県香取市)の絵師西村万七です。

この祭礼図では神輿渡御に続いて、東崎町から大町まで12の町組の出し物が見えます。祭礼図の長さは10m以上におよび、そこには600人を超える人々が描かれています。しかし実際の参加者は1700人以上にのぼっており、すべての人を描き尽くすことはできなかったと絵師は記録しています。

祭礼図のなかから、国分家が店を構えていた田宿町(現大手町)の出し物をご紹介します。田宿町では揃いの着物に身を包んだ人々100人と世話人など合計150人余りが行列に参加しました。出し物は大小3つの「万度」と、お囃子の「屋台」でした。

万度とは、柱の上部に行灯と造り物、花などを飾り付けたもので、これを掲げ上げて巡行しました。どこかの町組も万度を必ず1本は出しましたが、田宿町ではこれを3本も揃えました。先頭の花を飾り付けた万度は、子ども用のものです。2本目は相撲の土俵をかたどった造り物が付いた万度で、途中の立場(休憩所)で子どもたちが土俵入りの所作を披露

しました。3本目はたくさんの米俵を積んだ牛車で、まさに富の象徴ともいえる万度です。

万度は大きな飾りや花が柱の上部に取り付くため倒れやすく、これを高らかに掲げて移動するためには力とバランス感覚が必要になります。万度を華々しく扱うことが、見せ場であったと想像されます。

最後の屋台には、太鼓や笛を演奏する人々が見えます。屋台の下をよく見ると足が見えており、中の人々も歩いて移動をした「底抜け屋台」と分かります。

これらの出し物には多額の経費が掛かったはずであり、国分家をはじめとする町内の大店がその多くを負担したと推測されます。

「土浦御祭礼之図」には、町を挙げて開催された土浦城下の一大イベントの1コマが、生き生きと描かれています。7月3日(日)まで博物館にて展示していますので、ぜひご覧ください。

国土立博物館(☎824・2928)



土浦御祭礼之図(当館所蔵)